+博論書式３(論博書式３)

２０２０年　１月９日

# 博士論文の審査結果の要旨

| 専攻 | 保健医療学専攻 | 分　　野 | 先進的ケア・ネットワーク開発研究 |
|---|---|---|---|
| 学籍番号 | | 院生氏名 | 午頭　潤子 |
| 通学キャンパス | | | |
| 論　文　題　目 | 家族向けの認知症介護教室等の活用による<br>家族介護者の意識・行動変容に関する研究 | | |
| 審査結果（枠で囲む） | 合格　　不合格 | | |

＜審査結果の要旨＞

１　研究概要

本博士論文は、家族向けの認知症介護教室等に参加した家族介護者の参加後の意識及び行動の変容について実証した研究である。

第１調査では、Ｈ市で開催されている認知症教室参加者 1,000 名を対象に、参加目的、認知症の情報の必要性、認知症の情報の認知度、目的達成度、その他認知症教室に求めることを把握することを目的にアンケート調査を行った。第２調査では、２か所の認知症教室の７名を対象に、半構造化面接を行い、質的記述的分析の後、複線経路・等至性モデルにより行動変容・意識について社会的・文化的な背景や影響、文脈を取捨せず時間軸でその実相を明らかにした。（ＴＥＭ図）

第１調査の結果、認知症介護教室は、疾患・介護サービスの理解に効果があり、第２調査の結果、認知症教室の参加は介護を継続する自信に繋がり、「認知症重度化予防」、「ソーシャルアクション」、さらに社会問題となっている「介護離職防止」、「高齢者虐待防止」に関わる行動変容に繋がることが明らかとなった。認知症介護教室が「認知症の人への介護のスキルや認知症について学べる」といった第１義的な側面のみならず、内発的な意識の変容から社会的な行動変容まで効果が波及することを示している。

２　知見の新規性

認知症介護教室に関する研究は、一般的な効果に関する研究が主流とされ、参加した家族介護者の意識・行動変容まで深く示した研究はほとんどなされていない。特に本研究では、第２研究の３層構造になっているＴＥＭ図が見事で、意識の変容から行動の変容までの流れを実に具体的に示しており、認知症介護教室の効果に関する新たな一面を明らかにしている。この点が本研究の新規性であり、今後の認知症の家族介護者支援に貢献する研究として高く評価される。

３　審査過程

副論文を確認、研究の倫理面でも問題は無かった。審査会は、12 月２日、１月７日の２回開催され、口頭試問では研究の目的及び結果についての指摘、博士論文としての論文の体裁、アンケート調査の方法や内容、質的研究の方法や内容などについて修正を求めたが、指摘事項はすべて適切に修正された。

以上の結果から、審査会の委員全員は本論文が筆者に博士（保健医療学）の学位を授与するのに十分な価値があると認めた。

| 論文審査担当者 | 主　査　松永　千惠子<br>副　査　大熊　由紀子<br>副　査　石山　麗子 |
|---|---|